

あるまりの一生

小川未明

青空文庫

フットボールは、あまり坊ちゃんや、お嬢さんたちが、乱暴に取り扱いなさるので、弱りきっていました。どうせ、踏んだり、蹴ったりされるものではありませんけれども、すこしは、自分の身になって考えてみてくれないと思つたのであります。

しかし、ボールが思うようなことは、子供らに考えられるはずがありませんでした。彼らは、きやつ、きやつといつて、思うぞんぶんにまりを踏んだり、蹴ったりして遊んでいました。まりは、石塊の上をころげたり、土の上を走ったりしました。そして、体じゅうに無数の傷ができていました。

どうかして、子供らの手から、のがれたいものだと思ひましたけれども、それは、かなわない望みでありました。夜になると、体じゅうが痛んで、どうすることもできませんでした。まれに雨の降る日だけは、楽々とされたものの、そのかわり、すこし雨が晴れると、水たまりの中へ投げ込まれたり、また、体じゅうを泥で汚されてしまうのでした。雨の日が長くつづけば、つづくほど、その後では、いっそうみんなから、手ひどく取り扱われなければならぬので、まりにとっては、雨の降る日さえが、その後のことを考えると、あまりうれしいものではなかつたのです。

あるとき、フットボールは、みんなから、残酷なめにあわされるので、ほとんどいた
たまらなくなりました。そして、いつも、いつも、こんなひどいめにあわされるなら、革
が破れて、はやく、役にたたなくなってしまういとまで思いました。

こんなことを思っていましたとき、彼は、力まかせに蹴飛ばされました。そして、やぶ
の中へ飛び込んでしまいました。まりは、しげった木枝の蔭に隠れてしまったのです。

「まりが見つからないよ。」

「どこへいったろう？」

子供たちは、おおぜいでやぶの中へはいってきて、まりを探しました。しかし、だれも、
ボールがちよつとした、木枝の蔭に隠れているとは、気づかなかったのであります。

「ここんところではない。ほかのところかもしれないよ。」

子供らは、ほかの方面へいって探しはじめました。そして、見つからないので、みん
なはがっかりとしてしまつて、いつしか、どこへかいつてしまいました。

あとに、まりは、独り残されていました。しかし、また、子供たちがやってくるにちが
いない。そして、見つかったら、いっそうさかんに投げたり、蹴られたりすることだろう
と思うと、まりは、ため息をせずにはいられませんでした。

フットボールが、木枝の蔭で、小さくなっているのを、空の上で、雲が、じつと見ていました。なぜなら、雲は、まりが子供らから、いじめられるのを、かわいそうに思っていたからであります。

雲は、だれにも気づかれぬように、そと空から下へ降りてきました。

「フットボールさん、お気の毒です。私は、なんでもよく知っています。あなたほど、やさしい正直な方ではありません。それなのに、毎日、ひどいめにおあいなれされています。幸い、だれも、いまは気づきませんから、この間に、私といっしょに空へおいでなさい。そうすれば、もう、みんなの手がとどかないから安心です。そうなさい。」と、雲はいいました。フットボールは、こういわれると、日ごろから、空にいて、じつと下を見ていた白い雲でありましたから、なつかしように、

「ごしんせつにいつてくださって、ありがとうぞんじます。私みたいなものが、あの美しい空へいつて、すんでいるところがありましようか？」といつて、たずねました。

雲は、にこやかに笑いました。

「それには、いい考えがあることです。はやくなさらないとだめですから……。」といつて、雲は、まりを急ぎたてました。

フットボールは、雲くもの言葉ことばに従したがいました。そして、雲くもに乗のつて、空そらへ、高たかく、高たかく、昇のぼつてしまったのであります。

「まりさん、私わたしは、夜よるになると、こういうように月つきを乗のせて、大空おおぞらを歩あるくのです。しかし月つきは、夜よるでなければ、やってきません。あなたは昼間ひるまは、月つきのかわりに、ここからじつと下界げかいを見物けんぶつしていなされたがいいと思います。」と、雲くもはいいました。

フットボールは、白しろい月つきのように、円まるい顔かおもを雲くもの間あいだから出だして、下したをながめていました。だれも、自分じぶんをまりだと思おもうものはありませんでした。

「あすこに、昼ひるのお月つきさまが出でているよ。」といって、子供こどもたちは、仰あおぎながらいつているのを、まりは聞きいたのであります。

フットボールが、見みえなくなつてしまつてから、子供こどもたちは、ほんとうにさびしうでした。広場ひろばへ集あつまつてきても、いままでのように、きやつ、きやつといつて、遊あそぶこともなくなりました。

「あのフットボールは、どこへいつたろうね。」と、一人ひとりがいいますと、
「いいまりだったね。」と、ほかの一人ひとりが、なくなつたまりをほめました。

「あんまり、ひどく蹴けつたから、いけないんだね。」と、なかには、後悔こうかいしたものもあ

りました。

子供たちのいうことを、空で聞いていたまりは、かつて、自分のことなど、口にも出さなかつたのに、いまはこんなに自分のことを子供たちが思っているかと思うと、うれしいような、悲しいような気持ちでしたのであります。そして、それほどまでに、自分を愛してくれるなら、たとえ自分は、どんなにつらいめをみても、子供たちを、喜ばしてやりたいというような考えになりました。

まったく、まりは、いまは雲の上にいて安全でありましたけれど、毎日、毎日、仕事もなく、運動もせず、単調に倦いていました。そして、だんだん地の上が恋しくなりはじめたのであります。

まりは、地上に帰ろうかと考えました。そのとき、風は、彼にささやいたのであります。

「そんな気を起こすものではない。もしおまえさんが帰つたら、もう二度とここにはこられないだろう。そして、いままでよりか、もっといじめられるだろう……。」と、風はいつたのであります。

雲は、また、まりに向かつて、

「もう、あなたは苦しいことを忘れたのですか。ここに、こうしていたら、どんなに安心であるかshれない。あの子供たちも、じきにあなたのことなどは忘れてしまひます。」
いいました。

まりは、子供たちといっしよになつていた時分が、やはり恋しかつたのです。そして、ひとりぼっちとなり、やがて、みんなから忘れられてしまふと考えると、もうじつとしてゐるわけにはいきませんでした。

「雲さん、長い間、どうもお世話になりまして、お礼の申しあげようもありません。私は、下界へゆきます。そして、坊ちゃんや、お嬢さんたちのお仲間入りをいたします。私は、もう、さびしくて、さびしくてかゝないません……。」と、まりはいいました。

雲は、このことを聞くと、また、まりの心持ちに同情をしました。

「それほど、あなたが帰りたいなら、つれていってあげましょう。」と、雲はいいました。
ある夜、雲は、まりを乗せて下界へ降りてきました。そして、いつかまりの隠れていたやぶの中へ、そつと降りてくれました。

「まりさん、お達者にお暮らしなさい。さようなら……。」と、雲は、名残惜しげに別れを告げました。

「ありがとうございました。」と、まりは、お礼をいいました。

やがて、夜が明け放れると、やぶの中へ朝日がさし込みました。小鳥は木の頂で鳴きました。そして、ぼけの花が、真紅な唇でまりを接吻してくれました。

「まりさん、どこへいまままでいつていなさいました？ みんなが、毎日、あなたを探していましたよ。」と、ぼけは、なつかしげにまりをながめていました。

まりは、この地上のものを美しく、うれしく思いました。なぜ、自分は、この下界を捨てて、空の上などへ、すこしの間なりとゆく気になったろう。もう、これからは、不平をいわずに、みんなといっしょに暮らすことにしようと思いました。

子供たちは、どうしてもフットボールのことを思いきれませんでした。そして、またやぶの中へ探しにきました。彼らは、思いがけなくまりを見つけたのであります。

「あつた！ あつた！ まりが見つかったよ。」

「おうい、フットボールが見つかった！」

「みんな、早くおいでよ。」

その日から、広場で、前のようにフットボールがはじまりました。子供たちは、その当座は気をつけてまりを大事にしました。

しかし、いつのまにか、また乱暴にまりを取り扱ったのであります。なんとされてもまりは、だまっていきました。

こうしているうちに、まりは、もう年をとってしまいました。はね返る元氣もなくなれば、不平をいったり、逃れようとする勇氣もなくなっていました。子供たちのするまになつて、終日外へほうり出されているようなこともありました。

空の雲は、まりが疲れて、広野にころがつているのを見ました。雲は、あわれなまりを、氣の毒に思つたのであります。もし、二度と空へくるような氣があるなら、つれてきてやろうと思つて、雲は、だれも、人のいないときを見はからつて、空から降りてきました。「もし、もし、まりさん。」と、雲は呼びかけました。しかし、耳も遠くなつて、目のかすんだまりは、せつかくの雲の呼び声にも氣づきませんでした。雲は、哀しそうに去つてゆきました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 ㊦」講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷発行

1977（昭和52）年C第2刷発行

※表題は底本では、「あるまりの一生《いつしう》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：富田倫生

2012年1月21日作成

2012年9月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

あるまりの一生

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>